

アフメト・ミドハト著

『ファトマ・アリエエ女史、あるいはオスマン人女流作家の誕生』(後編)

佐々木 紳

はじめに——ふたたび訳者解題に代えて

(一) 凡例

本稿は、Ahmed Midhat, *Fama 'Aliyye Hanım yahüd Bir Muharri-i 'Osmanıyye 'nin Nes'etü* (Istanbul: Kirk Anbâr Matbâ'ası, 1311) の全訳である。底本には、トルコ共和国エルズルムにあるアタテュルク大学中央図書館 (Atatürk Üniversitesi Merkez Kütüphanesi) の「セイフェッティン・オゼゲ・コレクシヨン」(Seyferin Özege Koleksiyonu) に収められたオスマン語刊本を用いた¹⁾。訳稿の作成にあたり、刊本全二〇〇頁のうち一一二頁まで(「緒言 Trade」)「幼年期 Tufulıyyet」(「少女期 Savabet」)を前編、それ以降(「青年期 Sebâbet」)「若め妻 Genç Zevce」(「大成 Tekemmül」)を後編とした。訳文中の「()」内は訳者による補足ないし説明である。「くま

れに()」内に原綴を示した。訳者の判断で適宜改行した箇所もある。ヒジュラ暦の年代をグレゴリウス暦(西暦)に換算して二カ年にまたがる場合(たとえば、ヒジュラ暦一四四三年は西暦二〇二一年八月一〇日から二〇二二年七月二九日までである)、一方の年代に特定できなければ「二〇二一／二二年」のように表記した。

(二) 刊行年の訂正

本訳稿の前編の冒頭に付した「はじめに——訳者解題に代えて」において、訳者は原著者アフメト・ミドハト (Ahmed Midhat, 一八四四〜一九二二年) の書簡やこの評伝の記述内容に基づき、同書の刊行年を「一八九五年とするのが適当であろう」と推測したが、これにはやや修正が必要である。

あらためて確認しておけば、同書は一八九五年一〇月末に脱稿し、

その冒頭部分がただちにアフメト・ミドハトの発行する新聞『真実の解説者』(Tercüman-ı Hakikat) に連載された。ところがその後、同書の主人公ファトマ・アリエエ (Fama Aliye Topuz, 一八六二—一九三六年) の兄アリ・セダト (Ali Sedat, 一八五七—一九〇〇年) が内務省に掲載中止を申し入れたため、連載は中断を余儀なくされた。そこで、アフメト・ミドハトはあらためて教育省から出版許可を取得し、同年二月に同書の単行本化にこぎつけたのである。

ところが、アフメト・ミドハトがファトマ・アリエエに宛てて記した書簡をさらに精査すると、同書が一八九五年二月から翌九六年一月にかけて分冊のかたちで発行されていたことがわかる。実際、アフメト・ミドハトは九六年一月下旬の手紙のなかで、「そいういえば、貴女の履歴〔を記した評伝の原稿〕が教育省から戻ってきました。四分の三が印刷済みです。残りも近日中に済むでしょう」⁴と述べている。

以上の経緯を踏まえると、同書の刊行年は一八九五—九六年とするほうが適切である。なお、このように修正しても、同書がファトマ・アリエエの父ジェヴデト・パシヤ (Ahmed Cevdet Paşa, 一八二三—九五年) の死後に刊行されたこと、また同書に刊行年として記された「一三二一年」はヒジュラ暦ではなくユリウス暦 (ルーミー暦) の年代と考えるべきこと等、前編で確認した諸点に修正を加える必要はない。

(三) 訳語についての補足

本訳稿の表題を訳出するにあたり、訳者は「女流作家」という言葉を選んだが、この点について複数の方面から指摘を受けた。いずれも、女性作家にことさら「女流」の語を付すことは、男性作家こそ本流とする価値観を上書きすることにならないか、という趣旨であった。前編の訳者解題の地の文で、ファトマ・アリエエを「オスマン近代初の本格的な女流作家」などと評してしまったことを反省する次第である。

ここで「女流作家」と訳した「ムハッリレ」(muharrire) は、アラビア語で書き手を意味する言葉の女性形がトルコ語に入って転訛したものである (男性形はムハッリル muharriir)。ムハッリレにせよムハッリルにせよ、現代トルコ語になじんだ世代にとってはやや古風な響きを持つ (現代トルコ語では、たとえばトルコ語起源の「ヤザル yazar」という言葉で置き換えることができるが、こちらは文法上の性別を含意しない)。

以上を踏まえ、原語の有する古風な響きを保ちつつ性別を表示すべく、史料中に現れるムハッリレの語はあえて「女流作家」と訳した。本訳稿に見える同様のケースとして、たとえばエディーベ (edibe, 男性形 edib) があるが、これも同じ理由で「女流文士」とした。ムアッリメ (mu'allime, 男性形 mu'allim) を「女性教師」、ミユテアッリメ (müte'allime, 男性形 müte'allim) を「女子生徒」などとしたのも同様である。この点、諒とされた。

注

- (1) オスマン語とは、オスマン帝国期からトルコ共和国初期にかけて使用されたアラビア文字表記のトルコ語のことである。トルコ共和国では一九二八年以降、ラテン・アルファベットをもとに作成された二九の「トルコ・アルファベット」(Türk alfabesi)でトルコ語を表記することとされた。本訳稿の作成にあたっては、オスマン語刊本のほかに「トルコ・アルファベット」への転写版として以下の二点を参照した。Ahmet Mihat Efendi, *Fatma Aliye Hanım yahut Bir Muharrire-i Osmaniyenin Nezeri*, ed. Müge Galin, İstanbul: İsis, 1998; Ahmet Mihat Efendi, *Fatma Aliye Hanım yahut Bir Muharrire-i Osmaniyenin Nezeri*, ed. Ayşe Asır, İstanbul: Dergâh Yayınları, 2016.
- (2) このうち、前編は以下のとおり公刊されている。佐々木紳訳「アフメト・シドハト著『ファトマ・アリエエ女史、あるいはオスマン人女流作家の誕生』(前編)」『成蹊人文研究』(成蹊大学大学院文学研究科)二九、二〇二一年、四一〜八〇頁。
- (3) 同訳、四三頁。
- (4) Ahmed Mihat Efendi, *Fazıl ve Feylesof Kızım: Fatma Aliye ye Mekûpları*, eds. Fatma Samime Inceoğlu and Zeynep Süslü Berkas, İstanbul: Klasik, 2011, p. 334.

〔前編より続く〕

三、青年期

ピアンキがほしいとの悲願を達成する寸前でハンジュエリに心移りしたことは、ファトマ・アリエ女史の大成期に属する出来事であるが、そもその悲願は少女期の終わりに生じたので、この話題にひと区切りつけるべく、その結末にも筆を及ぼした次第である¹⁾。以後、われわれはアリエ女史のことを、意欲的で勤勉で賢明な乙女とだけ見なすことはできなくなるだろう。そしてまた、これに付言して、われわれは頭に覆いをつけた女子を想定しなければならなくなる。年齢が一三歳に達したら、その年ごろの女子は礼拝用の覆い布で頭部を覆うことが本邦における習わしだからである。

一方ではオスマン語や東方の学問²⁾の勉強を継続して進め、他方ではフランス語の勉強も継続して進めるようにとご母堂から期待されるようになったことは、大きな覚醒の証しと見なせよう。なぜなら、ヤンヤへの旅路で通訳を務めたことに加え³⁾、見立師や仕立師といった商人と取引したり相談したりするときにもアリエ女史の通訳が役に立つことを知り、ご母堂にそうした期待が膨らんだのも無理からぬことのように思われるからである。しばらくして、幸いなる都(イスタンブル)に在住する職業婦人や外国人の貴婦人ばかりか幸いなる都を訪れた女性旅行者も、くだんの女史をしばしば訪ねてきては長時間の面会や懇談に及ぶようになり、やがてご母堂もそれに気づくことになるのだが、フランス語の勉強の点で自慢

の令嬢にほかにもいろいろと気を遣わなければならなくなることは明白であった。とはいえ、彼女が頭部の覆いを付けたままであれば、イルヤス・マタル・エフェンデイがなお一年ほどフランス語を教授してもよいとの許しを与えたことは、せめてもの救いと思なせよう⁵⁾。

われわれのあいだで交わされた手紙のやり取りのなかで、以下の事実を知る機会にも恵まれた。私は、アリエ女史が身につけたフランス語の水準がこの程度の学習では到達不可能ではないかと訝しんでいた。ところで、もともとフランス人であったが今から一八〇二〇年前に(イスラームに)改宗したファーブル氏⁶⁾、別名ハック・エフェンデイのことをわれわれ二人とも知っており、ある手紙のなかで彼について話が及んだ。そのなかでファトマ・アリエ女史は、フランス語の学習を続けた様子について、ファーブル一家のことを交えながらつぎのように記している。

ファーブル氏またはハック・エフェンデイのご息女のアルフア嬢を、もちろん貴方もご存じのことでしょう。フランス語の勉強を先に進めるにあたり、この先生と結んだ交友はたいへん大きな助けとなりました。実のところ、アルファ先生はそのとき二五歳の娘さんでしたし、私のほうは一四歳でしたので、年齢の面で私どものあいだに交わるところはありませんでしたが、嗜好や拳措の面ではたいへん似かよったところがありまし

て、子どもの交友を十分に満ち足りたものにしてくれたのも、そうした共通点にほかなりませんでした。この娘さんのお父様はフランス人ですが、お母様はイギリス人です。したがって、ご本人もフランス人よりはイギリス人に似ています。彼女は週に四晩を今は亡きサフヴェト・パシヤのお屋敷で過ごす約束になっていたので、私どものもとは週にたった二晩しか泊ってくれませんでした。何となれば、もう一晩はご家族のもてで過ごすことにしていたからです。無駄なことにほとんど興味を示さぬお人柄で、たいへんまじめな態度の娘さんでした。私もまだ子供であったとは申せ、余事にかかずらう質ではなく、たいへん物静かな性格でしたので、私どもはたがいに気が合ったのです。別々にいるときやほかの人と一緒にいるときは、兩人ともおしゃべりより沈黙のほうを選んだのですが、いざ二人きりになると極めて饒舌に語らったものでして、あたかもたがいに言葉を取りおいていたかのようでした。私はこの娘さんのなかに、私にとって必要な女性教師を見出しただけでなく、私に必要な友人をも見出しました。彼女は家で私と交歓し、おしゃべりすることをたいへん楽しんでいたものです。彼女は私にフランス語の文法規則を書き取らせるところから始めました。それどころか「もう忘れてしまいましたわ」などといつては算術の授業も開いてくれたのです。その後、私どもは勉強を進めました。それは歴史や文学や倫理学に及びました。彼女は説明をすべて

フランス語でおこない、その返事をフランス語で求めました。授業が終わってからも、彼女はヨーロッパのこと、わけてもパリのことを話してくれたものです。当時はフランスとプロイセンとの戦争があつたばかりでして、彼女らは包囲下のパリにいたのですから、包囲や戦争の様子を語ってくれたのです。私が彼女から多くの学恩を受けたほどに、彼女も私から多くの学恩を受けておりました。当初、彼女はトルコ語を知らなかつたのですが、しだいに覚えてしまったからです。私はトルコ語で読んだ小説を、彼女にフランス語で語って聞かせました。彼女も私にそのやり方で、フランス語の文学作品を（トルコ語で）語ってくれたものです。こうして、気づけば夜中の七時か八時〔午前一時か二時ごろ〕になっていました。ついに、彼女も私にフランス語の小説を持つてきてくれるようになりました。私はすでに月二リラほどの小遣いを自分で使えるようになっていましたので、それでほしい本を買つてきてもらうことができました。アルファ先生が来るたびに、私どもはいつも八、一〇時間以上も連続で勉強し、語らいましたので、私どもの授業はよそでおこなわれる一、二時間ほどの授業の五、六倍に相当したことでしょう。それゆえ、私はこのお嬢さんからも速やかに学恩を受けることができたのです。

われわれが手紙をやり取りしているうちに、ファトマ・アイエ

女史がある手紙のなかで延々と説明してくれたのだが、一四歳を過ぎてははや完全に頭部を覆う状態になると、彼女はたいへんな孤独感に苛まれて大いに苦しみ、それゆえにアルファ嬢がやって来るたびに、まるで伴侶が来たかのように喜んだそうである。なぜなら、くだんの女史は一三歳までいつも「屋敷の」表向きで時を過ごし、そこに入りする人びとのなかでもホジャ・ムスタファ・エフエンデインをはじめとする人びとと親しく懇談することに慣れていたからである。また、奥向きにいても、多くの女性にとつて唯一の財産ともいふべき親類縁者にそもそも飽き足らなかつたからである。彼女にとつて、ご母堂のそばで行儀よくかしまつて過ごしている時間を除き、人に会つて話もできないとは死活問題も同然であつた。この状況下、彼女は自室で孤独な隠遁生活を送り、トルコ語やフランス語の書籍冊子のほかに何も気を紛らすものはなかつた。とはいえ、人は人との交わりを求める生きものである。ことに科学や文学や哲学において習得した知見を披露し、それを分かち合えるような心の友たる数人の人士と顔を合わせる必要があることはいうまでもなく、かかる次第で彼女はこの必要をアルファ嬢によつて満たしていたようなのである。

アルファ嬢のご尊父ハック・エフエンディ（「ファーブル氏」）はフランス人のなかでも真の学識者のお一人であり、彼が結婚したイギリス国民の女性も叡智を備えた女性のお一人だったので、アルファ嬢はこの両親の系統を正しく受け継ぐ才媛なのであつた。彼女は

ヨーロッパのあらゆる国民の一流文学に通じており、最近の文学作品の著者たちについて、あたかも個人的に知り合ひであるかのようにひととおりの情報を持つている人だったので、まさにファトマ・アリエエ女史が必要とする慰めの友となつたばかりか、女史の知見を広げて増やす強力な教師も同然となつた。したがつて、アリエエ女史がその歳までに身につけた知見が、アルファ嬢との如上の交友のなかで軽々にははかりかねるほどに拡充され、補充された様子が、いともたやすく察せられるのである。

ファトマ・アリエエ女史が哲学的に変貌していくのも、この青年期に始まつたことである。女史の全履歴のなかでもこの経緯は、ご関心のある向きにとつて格別に注目し値する部分であろう。女性に小説を読ませることがはたして有益なのか有害なのか、この点について各紙で議論が繰り返されてきたころ、われわれも手紙のやり取りのなかで取り上げる話題にこの問題を差しはさみ、あれこれと書き綴つたものである。叡智の財産をただ書物から得ただけで、ものの外形を注意深く掘り下げて考えない人びとは、たんなる物知りにはなれても哲学者にはなれないことはいうまでもない。だが、ファトマ・アリエエ女史には自然科学までも探究し、一家言をお持ちなのである。実際、彼女はそうした探究をご自身の筆で以下のように記している。

アルファ先生は二〇歳を過ぎた娘さんでしたが、そうした恋の

駆け引きをあげすけに口にするような人ではありませんでした。彼女の関心は、もっぱら文学と哲学に向けられていたのです。あれほど小説を読み込み、今なお読みつづけているにもかかわらず、彼女に小説の悪影響などみじんも見られません。それどころか、乙女たちの夢想に適いそうな話題だけでなく、恋愛をめぐって小説が哲学的なかたちで示してくれる暗く、恐ろしく、危うい片鱗にも目を向け、その点でみごとな考察をおこなうのでした。未婚既婚を問わず女性に対する悪しき影響が、ひとり小説だけに見られるわけではありません。女同士で語り合う通俗な恋物語マサナルだつてあるではありませんか。女同士でよく交わされる打ち明け話ハスレ、ハイルだつてあるではありませんか。まづは、そうしたものに注意しなくてはなりません。だれそのの息子がだれその娘にこれこれの次第で恋をして、多くの苦難を乗り越えた末に「四〇日四〇夜、婚礼の儀が執りおこなわれた。二人が本懐を遂げたので、われらも床に就くでしょう」などとする物語では、情熱と呼ばれるものが総じて上品な色合いで描写されるので、そこにあるおぞましく危うい側面に思いを致すこともなく、乙女たちはあらゆる面で若い恋人を夢想してやみません。打ち明け話のほうに話を移しますと、初めて私にそれをしてくれたのはレフィカ先生レでした。何度か詳しくお話ししたように、彼女はサードウク・ベイという名の士官学校メックテブ出のかたと懇ろの間柄になりまして、思いを遂げるべくすべてを

捧げる覚悟を決めました。自己犠牲の最良最善のかたちとしてレフィカ先生は「イストラームへの」改宗を選び、本懐を遂げたのですが、結婚してから一年後、ご夫君は元どおりベイオール界隈に入り浸るようになり、レフィカ先生はばやきながら「所詮、こうなる定めなの。何か打つ手がありまして……」などと氣のない返事を寄こすまでになりました。人生で初めて私を哲学的に開眼させ、哲学者のように考え込ませた問題は、これにほかなりません。一体全体、二人は愛し合う男女ではなかったのかしら、と。一年のうちに、二人の愛の強さや激しさに何が起こったのかしら、と。二度目に私の関心を引き、考え込ませたのも、彼女の親友の一人の娘さんと一青年との恋愛沙汰でした。双方の家族とも、この結婚を望んではいませんでした。愛し合う二人は父母のもとを飛び出して結婚しました。あいだに仲介人や調停者が入りました。父母らは罪深き子供たちの罪を赦し、結婚を認めました。ところが、どうしたのもか六カ月後には愛し合う二人のあいだに不和が生じ、一年後には離婚に立ちいたつたではありませんか。このたびも双方の家族は離婚が成立しないようにたいそう働きかけましたが、うまくいきませんでした。であれば、あれほどの愛、あれほどの情熱とは何だったのでしょうか。愛のこの種のおぞましい状況は小説なら多少は示されていますが、恋物語で耳にする愛だとか恋人だとか思われ人は、こうではありません。そうした愛の物語は、い

つも甘美のうちに幕を閉じるものです。「その後は楽しく安らかに暮らしましたとさ」などという言葉まで添えられるのですが、そうした言葉はまことにうらやましいかぎりです。まだ若く、未熟者ではありましたが、私なりに愛について考えたことどもの結論は、愛の種類とその性質について貴方が『クルク・アンバル』にお載せになった「愛」と題する記事の結論にも合致しております。⁽¹⁴⁾

その『クルク・アンバル』のことについても、ファトマ・アリエ女史と私のあいだに詳細な手紙が交わされることになった。年齢が一五〜一六歳にも達すると、読んだものから受ける喜びも変わりはじめ、ことに彼女の性格のなかでも旺盛な探究心や哲学的素養が増すにつれ、そのときまで彼女を楽しませていたものもはや喜びを与えなくなりました。たんに楽しみや喜びのためだけにものを読むのではなく、確実に何かを学び取るために読むようになったのである。それゆえ、オスマン語で書かれたものなかでも、われらが『クルク・アンバル』誌は彼女のお眼鏡に最も適った読物となり、彼女のお気に召したという。事実、彼女はこの点について詳細に述べた手紙のなかで、以下のように筆を進めている。

『クルク・アンバル』のなかでも「機械の観察からいかなる教訓を得ることができるか」と題する記事は、私が最も得心した

お気に入りの読物です。⁽¹⁵⁾先日差し上げたお手紙の一つで長々とご説明しましたね。もはや私は、見たこと聞いたことのすべてを一つの授業のように見なし、それについて懸命に頭を働かせながら、わずかなりとも真実を引き出すことに努めておりました。私の心持ちや思考に合ったこの記事は、私にとってこの点で刺激剤になるとともに、以前にも増して見たものすべてを調査探究し、そうしてたどりついた結論から真実を引き出すようになったのです。哲学^{フェルラウ}と呼ばれるものは、このような営みではありますまいか。

同じくアリエ女史は、すべてこの『クルク・アンバル』から得た結論として、読本はすべからず人間に何かを教えるかたちをとるべしとも述べ、つぎのようにいつている。

ご存じのとおり、若者に読ませるために作成されたフランス語の書籍には、たとえば蒸気船がどのように発明されたのかといった事柄までもが文学的な物語のかたちで記されています。フランス語でこうしたことを学ぶやり方は、トルコ語を通して学習するやり方とは別物です。私はそうした状況を見るにつけ、フランス語をいっそう重視するようになりました。なぜなら、私は明確に実感したのですが、幼少のころより学びたいと願っていたこの世のありとあらゆるものの状況を、フラン

ス語でやるほうがよほど簡単に見つけることができるからです。たとえば、トルコ語の史書を読むとき、そこに記されたアラビア語やペルシア語の語彙を解き明かしたり、散文や韻文の韻律のために頻用される言葉の意味を探り当てたりすることは大仕事でして、文意を解せずには頭は疲れ果て、ついに手に入ることのできた情報も疲労で混乱した頭のなかに紛れ込む始末です。フランス語にあつては、そのような情報はたんに明快かつ洗練されたかたちで書かれているだけでなく、各自の年齢に応じて理解可能な言葉や解説で、少しずつ順を追って記されています。「書き取り」方式で子供たちに正書法や文法規則を教えるべく作成された書籍もまた、すべてこのやり方で有益な情報に満たされています。それにしても、私はこうしたことも、なぜ貴方に縷々述べ立てているのでしょうか。よもやご存じないことでもありますまい。私が申し上げたいのは、本邦のオスマン語の既存の書物だけで教育を受けた若者は、フランス語で読んだ本の意味をやっと理解しはじめた子供が持つほどの情報すら手にしていない、ということなのです。要するに私は、ティーポットが沸騰したり洋梨が落下したりする様子から何がわかるかを学ぶことで、自分のものの見方や考え方をすっかり改め、およそ何を見たり聞いたりしようとも、「ここから何がわかるか」と考えて結論を引き出すことに心を致すようになりしました。そもそも私の天分や性向も、そうした探究心に

よってできあがっております。それゆえ「機械の観察からいかなる教訓を得ることができるか」という記事を見て、自分の母語でもかような読物が現れ出るようになったことに無上の喜びを感じ、以後は「クルク・アンバル」をそのような観点から熟読するようになりました。

アリエエ女史が、若者に種々の情報をもたらす点で『クルク・アンバル』に論考形式で書かれたものをこれほど重視し、かくも尋常ならざるかたちで熟読したことは、誇張でもありえぬことでもないものと思われる。同誌には今なお需要があるにもかかわらず、遺憾なことに『クルク・アンバル』が発行されていた時代から現在にいたるまで、若者や科学に直接関心のない人びとにも理解できるように単純明快なかたちで学術的な話題を記す方途に、本邦の文筆家は必要を感じてこなかった。ファトマ・アリエエ女史は別の手紙のなかで、科学に直接関心を持たぬ読者にも高度な学術的議論について専門的な知見をもたらすことのできる簡明な説物の例として、またも『クルク・アンバル』に掲載された消化と消化器官に関する論説があるものと述べ、詳細に論評している¹⁶。実は、この論考は自身の手になるものなので、それを称賛するとは自画自賛もよいところなのだ。が、生理学を修得した者以外にはとうてい理解の及びえないかくも高度な議論を、一人の若い女性にも理解可能なほどにやさしく記す技量は、いかにしても否定しがたいところである。

アリエエ女史が当時どれほど高い水準にあつたにせよ、本邦にはこんなに同程度の水準にある数百人ないし数千人の女性がいる。その読解力や理解力はもとよりのこと、記述力や説明能力のほども彼女らの作品から明白である。だが、遺憾なことに、倦まずたゆまず学問上の新発見や最先端の科学に触れられるような、平易でだれにでもわかる学術的な読物が存在しないので、知識面での欠落は覆うべくもない。要するに、ファトマ・アリエエ女史はたくさんの手紙のなかで、『クルク・アンバル』にかくも平易な言葉で綴られた学術的、哲学的論考から受けた多大な恩恵を告白し、説明しているのであり、そのお目の高さにあらためて感服する次第である。なおまた、彼女はこれに関連して、たとえばつぎのような文章を綴っている。

フランス語を通せば情報を速やかに得られることを知って私が悟ったことは、この言語についての知見をいつそう増やし、経験を積まなければならぬということとして、アルファ先生と私とのお付き合いもそれに比例して深まっていきました。こうした愛情と熱情は、のちに『クルク・アンバル』がいささか軌道修正してくれたのですが。人間たるもの、もちろん自分自身の言語で考えるほうが楽でやりやすいに決まっています。そもそもフランス語を学びたいという欲求は、おのれの知識を増やしてくれるような文章を読むためではなかつたでしょうか。私自

身の母語によつてもそのような作品が書かれているのを見て私が喜んだ様ときたら、たとえようもないほどです。そのころ、私はフランス語を今ほど理解していませんでした。多くの個所で辞書を引く必要がありましたし、いくつかの個所ではアルファ先生の解説を必要としました。ですが、『クルク・アンバル』のほうは私が自由自在に読み書きできる自身の母語で書かれていたのです。かくて私がこの雑誌にどれほど心を奪われたか、おわかりになるでしょう。そういえば、もう一つありました。そのころ、私はフランス語で、このようなことごとについて子供ないしは若者向けに書かれたものしか読むことができませんでした。ですが『クルク・アンバル』において、私は大人向けの、しかも知識人向けといつてよいほどの事柄を読み、十分に理解していたのです。はたして、ここから生じる喜び以上のものがありますか。しかしまた、私は『クルク・アンバル』で古今の学者を比較する記事を読んだとき、別世界に踏み込んだかのような気になりました。この記事に見える、さらなる探究を促してくれる書物が本邦には存在せず、ヨーロッパにあるという記述は、そのときまで私がフランス語に傾けてきた努力が決して無駄ではなく、逆にそうした努力をいつそう続ける必要があることを示してくれました。もう少しのところで、私は『クルク・アンバル』に満足してフランス語をおろそかにするところだつたのです。この過ちを正してくれたた

も『クルク・アンバル』にほかなりません。要するに、一人の女性を正しく導く点で、『クルク・アンバル』の影響力は一人の男性を正しく導くことに資するほどにも大きいのです。にもかかわらず発行が続かなかつたとは、まことに遺憾とすべきことでしょう。

アリエ女史が少しばかり化学にも入れ込んでいたとお聞きになつたら、驚かれるだろうか。叡智の美味を探求することにかけてはミツバチが蜜を欲するかのごとくであったこの尋常ならざる女性には、ミツバチのようにあらゆる花から蜜を吸う努力と楽しみをどうにも止めることができないようなのである。とにかくあらゆる学問の要所だけでも押さえておこうと切に望んでいたもので、いかなる方面であれ機会を見つけてはその方向に突き進んだ。令兄アリ・セダト・エフェンデイの化学の勉強に実験の面でも広がりを持たせるべく、お屋敷に設えられたささやかな化学実験室も、くだんの女史は存分に利用したという。このことを彼女がいかに簡潔な言葉で綴っているか、ご覧になるがよい。

兄の図書係をしていたと、いつか手紙に記しました¹⁸。この仕事から私がいへん多くの恩恵を受けたことを、もう一度告げておきます。本の名前を覚えるだけでも多としなければならぬほどの恩恵です。まして、わずかなりともその内容をうかがい知

ることができるとは、まことに過ぎたる恩恵ではありませんか。その上、兄の先生がたやお友達まで彼の部屋にやつて来て、さまざまな学問について議論しておりました。私は一二歳になるまで、そうした人びとのなかに交じつて議論を聴いていたものです。おまけに、それらの人びとが帰つた後も、わからなかつた箇所を兄に尋ねたものでした。化学の勉強が始まると、私は司書の仕事に加えて実験助手の仕事もするようになりました。瓶や乳鉢を洗浄して安置するとき、兄は使用人たちでは頼りなかつたので、私に助けを求めたのです。化学の実験がおこなわれるときには、私もそばにおりました。それゆえ、元素や組成物、化合現象や分析方法の何たるかから始めて、酸素、水素、炭酸なども覚えめました。はたから見ればさほど重要でもないのですが、たかがこれしきの知見であっても、銅を金に、また水銀を銀に変えようと努める錬金術師と、種々の物質を混合して新たにいろいろな物質を組成する化学者とを、私は区別できるようになつたのです。一人の子供、一人の女性、はたまた一人の男性にとつてでさえ、思考の面でこうして蒙が啓かれるとは、まことに侮るべからざることではありませんか。

本邦で女性が最も熱中することといえば、周知のとおり小説を読むことにほかならない。ファトマ・アリエ女史について、ここま

で私が提供してきた情報からも明確に察せられるように、当人は知識を身につける点でほかの女性たちの及ぶところではなく、あらゆることごとの真実に達したいという思いにおいては男性にも劣らぬほどの熱意の持ち主であった。一方、小説を味読することには男性も喜びを感じるものだが、ファトマ・アリエ女史は読書のこうした面においても男性やほかの女性に引けを取ることがなかった。だが、その関心はたんに小説の恋愛に関する話題を楽しむことにとどまらなかった。恋愛をめぐる見解のあらましは、先ほど記したとおりである。くだんの繊細にして鋭敏な洞察力を備えた女史は、小説の主人公たちに見てとれる子供じみた愛のかたちを、ほとんど軽蔑のまなざしで眺めていた。彼女はアレクサンドル・デュマやウージェーヌ・シュエー¹⁹⁾といったフランスの有名作家の作品を多読したが、恋の駆け引きよりも小説の舞台背景となる歴史的、政治的、学術的、哲学的な事柄のほうに注意のまなざしを向けたそうである。また、彼女が何通かの私信で述べているとおり、小説を読むことが当人の恋愛感情をかき立てることもなく、逆に結婚に対して恐怖の念すら抱かせるような影響をもたらしたという。一時など、多くの先輩のなかで一人の女友達と意気投合し、生涯結婚せず、農園で動植物に囲まれながら時を過ごそうなどと夢想してさえいたという。

くだんの女史は、小生の著作のうち『船乗りハサン』『パリのトルコ人』、『農夫ヒュセイ』、『モースルのスレイマン』²⁰⁾など歴史を題材にとったものからも、小説の観点からではなく歴史や哲学の

観点から、たいへん大きな利益を得ることに成功したと告白している。小説にそうして含まれている情報や判断を、ほかの書物に見出すことができなかったので、そのように歴史や学術に触れた小説をあたかも歴史や学術の読物として読んだというのである。

かくて〔ヒジュラ暦〕一二九五年〔西暦一八七八年〕、つまり当人が一六歳になるまでの時はこのようにして過ぎ、叡智の財庫もそのように満たされていたファトマ・アリエ女史は、この年、今は亡きご尊父（ジェヴデト・パシヤ）がシリア州知事に任ぜられたがゆえに、急遽シリアへの旅路につくことになった。二月の初日、荒天のなかロイド社のハンガリア（Hungary）号という汽船に乗り、イスタンブルからベイルートに向けて出航したという。数年前、当人にフランス語を教授する労をとったイルヤス・マタル・エフェンディも一緒だったそうである。汽船には大勢の外国人の男女がいた。地中海の天候は良好だったので、彼女は一等客室の乗客用の散策スペースで外国人の女性たちと知り合い、フランス語で会話をこなうようになったという。フランスのパリで生まれ育ったアルファ嬢の語調がおのずとアリエ女史にも移り、また女史がこの外国語を自由自在に話すので、まわりのご婦人連中は彼女がこの言語をパリで習得したにちがいないと決めつけた。これに対してイルヤス・マタル・エフェンディが、この言語は彼自身が教授したものであると告げると、その物言いが彼のアラビア語訛りのフランス語に不釣り合いだったこともあり、ご婦人たちの失笑を買ってしまった

たという。結局ファトマ・アリエエ女史が、イルヤス・マタル・エフエンデイの教授を受けたことを告げるとともに、イスタンブルでアルファ嬢なるバリ出身の女性から発音の矯正を受けたことも説明したので、ご婦人たちは納得したのであった。

くだんのシリア行きを、アリエエ女史は少しも気に入らなかったそうである。当地での気晴らしといえ、土地の習わしに従い、馬に乗ってダマスクスから一時間半の行程にあるダンマール（「ドゥンマル？」という名の場所まで行ってくることくらいであったという。かつてアレppoに住んでいたときにはロバに乗り、ヤンヤに行ったときには馬に乗って学んだ馬術の技量は、こうして実を結ぶことになった。一方、彼女は当地で実際に目にしたり考えたりしたことごとを、毎週郵便を通してアルファ嬢にフランス語で書き送った。このやり方は当人にとって一つの気晴らしになっただけでなく、フランス語で書いて意思表示をする力を伸ばす点でも助けになったそうである。

彼女がシリアを気に入らなかった理由はいくつもあるが、その一つは当地のヒツジが「ウルバ」と呼ばれる香草を食ませられていたため、その香りが肉や乳やチーズにまで染みついていたことであつたという。くだんの女史は、その香りがどうにも好きになれなかつた。肉を野菜類と一緒に調理しても、それに染みついた香りが消えることはなかつたそうである。

彼女は私がおこなつた質問に対して、シリアにいるあいだに勉強

から遠ざかってしまい、イスタンブルで身につけた学習水準をいつそう高めることができなかつたと述べるとともに、つぎのような状況に遭遇したとも語っている。

私どもはシリアにおいて、幾度かイギリス人やアメリカ人の旅行者の奥様がたから訪問を受け、それを楽しみみの機会としていたものです。そうした人びとのうち私どもは著名な令夫人レディに出会つたのですが、彼女は「ご夫君とともに砂漠の奥地を旅して戻ってきたところでした。先に申し上げておきますが、のちにイスタンブルに戻つてから、私どもは彼女らが出版した旅行記を見かけました。書籍の巻頭には、女性がマシユラフ（「ゆつたりした上衣」）をまとつた姿で役畜とともにたたずんでいる絵も添えられていました。くだんの夫妻はシリアで数日間、天幕を張つて暮らしていたのです。彼女らが私どものもとに初めてお越しになつたとき、オスマン帝国の大官の奥向きにフランス語を話す娘がいることに驚きながらも喜んだようでした。彼女らはその後も幾度かお越しになりました。ご本人はアラビア語をご存じでしたので、父とはアラビア語で、そして私とはフランス語で語りました。彼女は私のフランス語の習得具合にたいへん満足なさつたので、会話の練習相手がいなかったために私がこの言語を忘れてしまつたら残念だとおっしゃって、それを忘れぬためにもたくさん本を読むようにと勧められました。シリ

アの上流層のお屋敷をご案内して奥方連中とくだんの令夫人を引き合わせるお役目は、私に任せました。彼女は画家でしたので、木筆で私の絵を描きたいと懇望なさいました。私はさほどの差しさわりもあるまいと考えて拒まなかったのですが、どうしたわけか彼女のほうがうろたえてしまい、絵を描くことができませんでした。今にして思えば、描いてもらわなくて正解でした。なぜなら、彼女はご自分が書いた旅行記にそれも添付したにちがいないからです。

この女性の勧めに従って、ファトマ・アリエウ女史はイスタンブルからたくさんのフランス語の小説を取り寄せ、読みはじめたという。だが、いずれにせよイスタンブルの進歩からは遠ざかったままであった。九カ月後、ご父君はシリア州から離任してイスタンブルに戻る際、季節が冬に当たっていたので、奥向きの人びとをご子息アリ・セダト・エフェンディとともにベイルートに残していった。アリエウ女史はそれから三カ月後の(一八七九年)三月五日、ロイド社の汽船アポロ (Apollo) 号でイスタンブルに戻ったが、その途次、六〇過ぎの徳高き老人で音楽に造詣の深い船医と語らう機会に恵まれた。この御仁はたいへんな話好きであり、フランス語を話すムスリム女性に生まれて初めて出会ったということで、哲学談義はもとより宗教談義にも花を咲かせたそうである。これはファトマ・アリエウ女史にとって願ってもない恩恵にほかならず、この一年は

ど新たなことを吸収せずに増えることのなかった知識の財庫を補充すべく、この機会を存分に利用したという。

シリアからイスタンブルに戻ってくるにあたり、ファトマ・アリエウ女史が何よりも楽しみにしていたのは、アルファ嬢との再会にほかならなかった。まだシリアにいたころから思い描いていた新たな計画に従って、アリエウ女史はアルファ嬢とともに本格的なかたちで学習研鑽に努めようと決めていた。だが、この間に女史が陛下〔オスマン朝第三四代君主アブデュルハミト二世〕の侍従武官であった上級大尉(現在は少将)のファアイク・ペイと夫婦になるという話を持ち上がると、くだんの計画を実行に移すことは当然ながら先延ばしにされ、この幸多き結婚が〔ヒジュラ暦〕一二九六年〔西暦一八七九年〕に実現した。数えてみるに、そのときファトマ・アリエウ女史は一七歳であった。

四、若き妻

知識を増やすことに尋常ならざる関心を抱いていたファトマ・アリエウ女史は、青年期の最後に結婚の可能性が頭をよぎるようになると、この自然のことわりが自分にとって勉学の妨げになるのではないかと考え、ほかの娘連中がかたときも忘れずに抱く甘美な幻想〔つまり結婚〕に、ただただ恐怖を抱くばかりであったという。それでも、人類にとって不可避の通則にして、人間生活にとって最も神聖かつ必要不可欠の結婚という習わしが、いよいよ現実味を帯びて

くると、当人にとって生涯の伴侶となる御仁もまた学識のある人物だということ、ともに力を合わせて励む希望が開け、これはくだんの女史にとつて懸念を払拭する大きな助けとなったそうである。

結婚披露宴が催され、新郎新婦がたがい十分に打ち解けた後、学術や文学や哲学について語らう段になり、そうした会話が始まった。ところが、「(新郎の) ファーイク・パシヤの軍人としての学識は、ファトマ・アリエ女史が文学や哲学について有する知見とうまくかみ合わず、事態は一変した。たとえば、ファーイク・パシヤは妻が小説を手にしているのを初めて目にするると不平を並べはじめ、頭を覆った女性(成人のムスリマ)がそれを読むことの危険性を説き出した。彼はそれを引き裂いて投げ捨てさせたという。この状況はアリエ女史の納得するところではなかったが、父親に次いで夫にも敬意を払い、つき従うことこそ自分に課せられた務めである。と彼女もわきまえていたので、それに異を唱えることもできぬまま、小説を片づけてしまった。

それでも、せめて身につけたフランス語だけは忘れぬようにと、夫とフランス語で会話をしたいと打ち明けてみた。ところが、ここでも双方のフランス語の能力が釣り合わなかったことが一つの妨げとなった。夫のほうが能力的に上であれば、向学心のさかんな妻にとつてどれほど大きな恵みとなったことか。だが、残念ながら立場は逆なのである。アリエ女史はフランス語を自由自在に話したり読んだりできる。読んだことをみな十分に理解している。さらには

文章を書くことさえできるのである。ファーイク・パシヤのほうは、学校の授業で身につけた水準を、その後も自分自身で努力を重ねて向上させることができなかった。夫婦のあいだで実際に教えたり教わったりする必要がある場合、物事の道理にかんがみ、上に立つて教える役目は夫のほうにあつてしかるべきところ、反対にくだんの二人のあいだではその役目がいやおうなく妻に回つてしまつとは、順序が逆のように見受けられる。ファーイク・パシヤは、もちろん妻からフランス語の授業を受けることをよしとしなかったが、それでもたんに妻と会話をするだけでなく、おのれの学力や思考力を向上させる助けとするためにもフランス語を学ぼうと決意した。とルヤス・マタル・エフェンデイから授業を受けようとした。ところが、この間にイルヤス・マタル・エフェンデイがお屋敷を去つてしまつたので、この決意が実行に移されることもなかった。

要するに結婚に続く数年間、ファトマ・アリエ女史にとつて勉強や研鑽に励む可能性は閉ざされ、それゆえに青年期に身につけた知見を保持することはもっぱら記憶力に頼るほかなかった。彼女はもともと必要や機会のないかぎりご尊父(ジェヴデト・パシヤ)に会うこともなかったが、結婚してからは面会することもますますまれになり、令兄(アリ・セタト)とのやり取りやつき合ひもすっかりおざなりになつてしまつたので、そうした方面から恩恵を受ける扉も閉ざされてしまつた。それから数年がこのようにして過ぎた後、彼女はようやくオスマン語の出版物を読む時間を見つけ

られるようになったという。しかし、それらのなかでも小説のたぐいについては、依然として言いつけに背くかたちで読んでいたそうである。

しばらくして、彼女にものを書きたいという欲求が兆したという。最初に筆の試しとしてウージェーヌ・シューの『七つの大罪』(Les sept péchés capitaux) という作品のなかの「虚栄」の部分を読しはじめた。翻訳をかなり進めたとき、これをどうするつもりなのかと令妹(エミネ・セミイエ)に尋ねられたという。アリエウ女史はできることなら出版したいと答えたが、そのことにご尊父やご夫君の許しが与えられるかどうかでも考えずに発せられたその返事は、一笑に付されるばかりであった。その後、さる文筆の士がウージェーヌ・シューの同じ作品のうち「大食」の部分の翻訳して出版し、ほかの部分も出版されるにちがいないと見込まれたので、彼女はこれ以上翻訳作業を続けることが無意味であると悟ったのであった。

〔ヒジュラ暦〕一三〇三年〔西暦一八八六年〕つまり結婚してから七年目、ファアイク・パシヤはアナトリア飢饉ゆえに公務でコンヤに赴いた。一ヶ月続いた彼の留守中に、くだんの女史は研鑽と読書を続けようと心に決めていたのだが、今回は病気がその妨げになった。しかも、その病気は極めて深刻なものだったという。だが、医者たちがまさに匙を投げ出した後、主のおおしみとお情けにより快方に向かったそうである。

ファアイク・パシヤがコンヤから戻ってきてからも数年ほど、アリエウ女史の研鑽は思うように軌道に乗らなかつたが、小説のたぐいを読むことが女性にふさわしからぬことであるとの存念をファアイク・パシヤが改めたので、読書の幅は一挙に広がりを見せた。ついにジョルジュ・オーネの『ヴォロンテ』つまり『意志』と題する小説を、妻も夫もたいへん気に入ったので、これを翻訳すべく彼女が許しを請うと、ファアイク・パシヤから許可が与えられ、翻訳に取りかかった。ファトマ・アリエウ女史がたんに出版界で存在感を示すだけでなく、ご尊父の薫陶を受けて学知を完成させる点でも、くだんの『意志』なる小説の翻訳は幸先のよい端緒となったので、この点にかかわる説明はご本人の筆に任せることにしよう。彼女はつぎのように記している。

ファアイク・パシヤがコンヤから戻ってきて三年後のことでした。私は体調がすこぶるよかつたので、ジョルジュ・オーネの『ヴォロンテ』を読み、この小説をたいへん気に入りました。(登場人物の一人)エミリ(Emilie)の境遇がとてよく理解できました。これをぜひとも翻訳したいとの思いに駆られました。ある日、夫婦で座っていたときのこと、夫に向かつて「ねえ、どうかこれを訳してみたいのですが」と訊いてみました。彼は「それでは訳してみたら」といいます。「出版することも許してくださるの」と尋ねると、「もちろんだとも」と

いったので、私はたいへん喜びました。そのようにこころざし
てただちに翻訳に取りかかり、分冊の二つ三つ分を訳してしま
いました。ある日、父（ジエヴアト・パシヤ）が彼の婚殿グアイマド（つ
まりファーク・パシヤ）に何か伝えることがあつて私どもの
部屋に入ってきました。父は、そこにある書付は何かと尋ねま
した。婚殿は、私が小説の翻訳をおこなっていることを告げま
した。私は胸の鼓動が高まりました。父は「どれ、見てみよ
う」といい、紙束を手にして自室に持っていききました。しばら
くして、父がふたたび私どもの部屋にやってくる時、「いやはや
や、これは何とみごとな出来栄か。この娘がかくも筆が立つ
とは、私も全然知らなかつたよ。おまえは今までこうした力が
あることをどうして隠していたのかね」といいました。私はこ
の言葉の真意と真剣さをはかりかね、ただ驚くばかりでした。
私自身にとりえがあるとするれば、それはフランス語をよく知っ
ていることくらいです。でなければ、トルコ語の作文が上手だ
などと思つてもみないことでした。私が作成した訳稿のトルコ
語は、ファーク・パシヤに訂正したり手を入れたりしてくれ
るように頼んでいたのですが、そのことを父に告げると、「だ
めだぞ、これに手を加えてはならぬ」といいます。そこで、私
は父に批正を乞うそぶりで彼の顔をうかがつたのですが、「私
に頼まれても、これに手を加えるつもりはない」といいまし
た。どうにも解せず、夢でも見ているのではないかと思つたほ

どです。ついに小説（の翻訳）を出版する決定が下され、同時
に序文を書かなければならなくなりました。ある晩、四時（午
後一〇時ごろ）まで翻訳作業を続けるとともに、序文を書くこ
とも考えはじめました。どこから書き起こそうか、どのよう
に書こうか、何を述べようか、といったことを考えたのです。何
せ生まれ初めて自分自身の文才カガシでものを書こうというのです
から。まぢがいなく、筆は私の掌で一時間ほど遊んでおりま
した。眼前の書紙もまた、同じ長さだけ私の筆を待ち望んでお
りました。ついに心の底からバスマラ（慈悲深く慈愛厚き神
の御名において」という祈念の定型句）を唱え、私は書きはじ
めました。何を書いたかといえ、とにかく思い浮かんだこと
を書いたのです。けだし上手に書かれた文章とは、みなこのよ
うにして書かれるものではないでしょうか。翌日、書き上げた
ものを父に見てもらうと、彼は翻訳のとき以上にそれを見て驚
き、「これは翻訳ではなく著述カガシというものだ。これには文章作
法だけでなく文才を要する。いやはや、おまえに文才まであつ
たとは」といいました。何かまぢがつているところはないかと
私が尋ねると、彼は「取り除くべき余計なところも、付け加え
るべき足りないところもない。これに手を加えてはならぬ」と
いいました。²⁶その後、翻訳された部分が（出版許可を取得する
審査のために）教育省に回され、そこからカスバルという名の
書肆シヤに渡りました。²⁷かくて第一分冊のうち五〇部が私どもの手

元にやって来たのです。このうち数部を一つずつ封筒に入れ、宛先にいくつか新聞社とその他一人二人の名を記しました。私はその一通の宛先に「第一等の文士アフメト・ミドハト・エフェンディ様へ」と書かれているのを目にしました。これに喜ばなかったといえは嘘になりますが、私自身があえてそのようななどと思つたわけでは断じてありません。一方では「意志」の翻訳を続けておりましたが、他方では『セルヴェト』紙のくだんの記事を目にしました。²⁸『意志』の第四分冊が出た後、『真実の解説者』²⁹に掲載された「女流文士」と題する記事も目にしました。³⁰これには礼状をしたためる必要があるといわれたのですが、作文にあたっては呼び名を「慈悲深きエフェンディ様」とすること以外に何もいわれず、あとは私の文才に託されました。私は礼状をしたためるべく自室に戻りました。部屋は一人きりでした。貴方様が何者であるか、一〇歳のころから存じ上げてはいましたが、³¹その貴方に礼状を書くことがどれほどの難事であるかと思うたびに、冷や汗をかいたものです。書くべきことは翌日までに絶対に間に合わせなければなりません。またもや聖なるバスマラをこの仕事のために唱え、私は書きはじめました。書くほどに心が安らぎました。たくさんのことごとを書いたのですが、それがお眼鏡に適うかどうか、はかりかねたことはいくつでもありません。みな「みごとな出来栄です」といつてくれ、礼状は発送されました。³²その後のことは、

私よりも貴方のほうがよくご存じのことと思います。

事実、その後の出来事はくだんの女史よりも私のほうがよく知っている。それどころか、私よりも読者諸賢のほうが多くのことをご存じであろう。なぜなら、この出来事から六く七年が経過したものの、『意志』の訳者³³をめぐり出版界や私的な集まりでささやかれた噂が今も記憶を離れないからである。この噂の梗概は、くだんの女史のちにアラケル書店を通して刊行した『旧訓』³⁴と題する著作に小生が付した序文でも述べたが、その事情は以下のとおりである。この二〇く二五年ほどの女子児童に対する教育指導の結果として、ファトマ・アリエ女史のような人物が登場したことに、ほとんどの人は驚愕し、信じるのができなかつた。だが、それをひとり『真実の解説者』³⁵だけがありうべきこととして受け止め、この初めての著作にこと寄せて、われらが進歩の時代をこほいだのであつた。

かような女性翻訳家³⁶や女流作家³⁷が存在するなど、われらがオスマン帝国の進歩の度合いからしてまったくありえぬことと考える人びとは、『ヴォロンテ』³⁸がアリ・セダト・エフェンディによって翻訳され、令妹(ファトマ・アリエ)の名義で刊行されたのではないかと憶測して吹聴した。ところが、この真相に通じた人びとは、くだんのエフェンディの存念がこの翻訳に反対であつたこと、そして、ご尊父(ジェヴデト・パシヤ)がそれに賛成したことにはさへ反

発したことを知っている。それでも、なかには憶測をいつそうたくましくして、今は亡きご尊父の批正の労にあずかったにちがいないなどと吹聴する者もいた。その上、この間に『真実の解説者』で連載が始まった「イスラームの女性たち」において、いくつか宗教的な問題や哲学的な事柄に論及があったことも、そうした方向での憶測を補強した。だが、くだんの作品は、悪意をもって眺める人びとからすればファトマ・アリエエ女史のような人物が書いたには出来すぎに見えるのだろうか、ジェヴデト・パシャほどの人物が書いたにはいささか物足りないと考える者はいなかった。

一時など、この小生の筆が入ったのではないかと勘繰られもした。ファトマ・アリエエ女史の文体が小生の文体によく似ていたことも、この憶測を補強した。だが、この点に驚くべきことなどあるうか。つまり、当人も告白しているように、彼女は一〇歳のころから小生の作品をすべて読みつくすことに没頭し、いともたやすくそれらを理解した。そして、たいへん気に入ったので、それらをほとんど暗記するまでになった。人間とは、むしろこうして没頭したものを模倣しようとするものである。小生は簡潔に書くという新たな道筋を切り拓くことにこの三〇年ほど努めてきたので、この文体を好む人びとは何もファトマ・アリエエ女史に限ったことではない。もつと大勢の人びとが、このやり方でものを書いているのである。この簡潔な文体を採求する人びとによって書かれたのがみなアフメト・ミドハトに帰せられると考えてよいのなら、ファトマ・アリ

エエ女史に対して与えられる評価もまたそのように考えてよろしからう。

かくて『意志』の翻訳が、ファトマ・アリエエ女史にとつてたんに出版界で存在感を示すだけでなく、ご尊父の薫陶を受けて学知を完成させる点でも幸先のよい端緒になったと、先ほど記しておいた。オイラー博士の書簡の抄訳⁵⁶⁾、彼女が小生に送ってくれたいくつかの書簡、言葉の問題に関する論考⁵⁸⁾、それに「イスラームの女性たち」を『真実の解説者』紙に発表し、『旧訓』を単行本のかたちで刊行したことは、そうした幸先のよい始まりが出版界において存在感を示すにあたり、みごとに結実した事例にほかならない。一方、彼女がご尊父からどのように薫陶を受け、学知を完成させるべく努力を傾けたかについては、また別の話題なので、これを以下のとおり別個の章として詳説する必要があるかと思われる。

五、大成

『意志』の翻訳は、今は亡きジェヴデト・パシャが自分の娘に注意を向け、一目置く端緒となった。そのときまで、ファトマ・アリエエ女史が有するイスラームについての知識もヨーロッパについての情報も、ご尊父はとくに聞き知ることもなかったばかりか、自分の娘がオスマン語で何ごとかを綴れる力を有していることにもいっさい気づかなかつたと、この点についてさらにいくつかのことごとを付け加えながら、私に何度も打ち明けてくれたものである。だ

が、自分の娘のこうした様子をどうして知ることができようか。少年期に子供に会いたいと彼が望んだとき、そばに招き寄せて三〇分から一時間ほど楽しい時を過ごすだけの面会において、彼女の勉強の進み具合を試したり確かめたりすることなど、もとより不可能なことのように思われる。結婚後はといえ、父と娘との関係もいっそうおざりなものとなり、時を挾はずに会うことも叶わぬことは贅言を要しない。それゆえ、小説『意志』が翻訳され、それに続いて著されたものが徐々に発表されたとき、今は亡きジェヴデト・パシヤはある時期まで自分の娘がこうした力を有していることに確信が持たず、アリエエ女史にいかなる方面からどのような経路で手助けがおこなわれているのか長らく思索したものと、私に話してくだされた。その上、ある日のこと、「アリエエが書いたものを添削しているのが貴殿ではないかとの存念が、私の頭から離れないのだ」とおっしゃったので、小生からつきのお言葉を返した。

『意志』なる小説の翻訳を、小生は出版されてから目にしたし、ましたが、貴方様はその草稿をご覧になつていらつしやいます。したがって、小生なりほかのだから添削したり手助けしたりしたとすれば、それは貴方様のためにおこなったことになりましょう(もちろん、それでは前後関係のつじつまが合わない、ということ)。その後、お嬢様は『真実の解説者』に掲載される諸作品を小生に添削してほしいと執拗にお申し出に

なつたのですが、正直に申し上げて朱を入れるべき部分などみじんもなかったのです。ご子息(「アリ・セダト」)のお力添えがあつたのではないかと疑い、噂する者もおりますが、かような邪推には何の根拠もありません。なぜなら、アリ・セダト・エフェンデイは本件で令妹を手助けするどころの話ではなく、出版界のただなかで令妹が作品を発表することをよく思わず、賛成しなかつたことが確認されているからです。

言論界に格別の成功を収めて第一歩を印したファトマ・アリエエ女史が、かのご尊父の注意と敬重のまなざしをひとたび自分に向けて惹きつけると、それまでの父と娘とのあいだにあつた関係性は一変した。ジェヴデト・パシヤは夕刻になると令嬢をおそばに招き、しばらく対話をおこなつた。こうした対話の目的は、アリエエ女史を教え導くためではなく、むしろ彼女の知識、彼女の思考、彼女の才能のほどを見極めるためであつた。また、そうしておこなわれる対話においては、お父様の言い分に敬意を表しますなどといつて自由な意見を発することを控えぬようにと、とくに言い聞かせた。このようなかたちで長らく話し込んだ末に「判明した」くだんの叡智あふれる令嬢の有する知識と豊かな才能は、ご尊父を信じられぬほど驚愕させたのであつた。とあるラマダーン月のこと、聖なるベヤズト・モスク⁽¹⁰⁾において、ジェヴデト・パシヤはこの驚きを小生につぎのように語つて聞かせた。

あの娘の様子には驚いた。読んだり学んだりしたことはまだまだ限られているが、あの知性は極めて高度な議論にもついでい
くことができる。人間として未恐ろしいほどだ。エルケキ男であった
なら、必ずやきちんとした教育を受けさせたものを。まことの
大賢人になっただろうに。

彼に神のお慈悲がありますように。⁽⁴⁾

それからややあって、ファトマ・アリエエ女史から入手した手紙
のなかに、ご尊父とのあいだに対論形式でおこなわれた授業につい
ての話題が交じるようになった。というのも、当時ジェヴデト・パ
シヤは司法大臣の職を離れ、日中はたいてい（ルーメリ・ヒサール
の）海辺のお屋敷にいたからであり、ご自身が種々の学問に対し
て抱く飽くなき愛情と熱意のほども贅言を要しないので、日中は夕方
まで、また夜中は就寝の時刻まで、ずっと聡明な令嬢にかかりきり
だったそうである。

この授業がおこなわれる様子を、ファトマ・アリエエ女史はお
りに触れて私にも教えてくれた。初期の手紙では、論理学や修辞学や
論争術についての対論がおこなわれたとの情報が提供された。しば
らくして、聖なるマスナヴィー⁽⁴³⁾（の授業）が始まったと伝えられ
た。また、この間に『外套の頌詩』⁽⁴⁴⁾の授業も設けられた。イブン・
ハルドゥーンの『歴史序説』の翻訳を読み、それについてご尊父か
らく皆さんの考察や評価が講じられたとうかがった。アブル・フィ

ダー⁽⁴⁶⁾やイブン・ハッリカーン⁽⁴⁷⁾に関する多くの話題が、ご尊父によつ
て愛智の令嬢に解説され、教え込まれたと聞く。あるときなど、ア
リストテレスやプラトンの哲学とイブン・ルシユドやイマーム・ガ
ザリー⁽⁴⁸⁾の哲学とのあいだで比較が試みられたのだが、ファトマ・
アリエエ女史はこの比較をデカルト、スピノザ、ダーウイン、オー
ギュスト・コントといったヨーロッパの学者たちの学知にまで広
げ、とくに彼らの生涯の初期のことや精神的成長について素描した
ものをこの小生に送ってくれた。それは今でも私のもとに保管して
あるが、出版されれば大冊をなすほど詳細を極めている。対論の最
中には、話の流れでアラビア語やペルシア語の詩がたくさん発せら
れる。その繊細な意味合いとともに翻訳と解説がおこなわれたそうで
ある。その価値を知る人びとにしてみれば、この授業だけでも世界
に匹敵するほどの値打ちを有するお恵みと見なしえよう。さらに
は、聖なる（イスラームの）法学⁽⁴⁹⁾の叡智についても十分な研鑽と吟
味が試みられたのであった。⁽⁴⁵⁾

アリエエ女史がご尊父から得た学術的知見について私に伝えてく
れた情報は、ご尊父がまだ存命中に提供されたものであり、これに
ついてはくだんの故人と私とのあいだにも多くの話が交わされた。
何となれば、アリエエ女史と私とのあいだにある心の父娘関係は、
彼女のご尊父とご母堂のお認めとお許しを得て結ばれた関係であ
り、それゆえに今は亡きジェヴデト・パシヤとどこで出くわそうと
も、われわれの話題の中心を占めたのはアリエエ女史の勉学の進み

具合にほかならなかったからである。なお、かくも確かなかたちで得られた情報によれば、「実の」父娘のあいだでおこなわれた対論や教授〔の内容〕は、やがて書き留められるようになり、その名も「アリエエのための講義録」(Dirdis-‘Alivye)と題された。くだんの講義録がいつそう整理され、刊行されることで利用の便に供されれば、ひとり本邦の女性のみならず、男性のなかにもその利益にあずかりたいと切望する者がたくさん出るにちがいない。⁵⁰⁾

要するに、朝方に顔を合わせた父と娘、つまり教師と生徒は、対論の流れを損なわぬようにと、昼食をともした後、夕方まで対論を続け、夕食もとりに取って授業を六時〔午前零時ごろ〕まで及ぼすこともまれではなかった。ご尊父の教授の技量と令嬢の学習の素質とを考量してみれば、その帰結が奈辺にいたるかはおのずと明らかであろう。この点で、私は読者諸賢の想像力に好適の導き手となることができる。

さて、われらがオスマン帝国の書架に決定的に欠けているものの一つは科学科学の歴史にほかならぬという思いが、かねて私の頭を離れなかった。人類の文明が始まって以来、科学がいかにして出現し、どのように順を追って細分化したか、またそれぞれの科学に対してだれがどのような貢献をなし、その末にいかにして科学が現在の完成された水準に達したか、といったことについて本格的な作品を書きたいとの意欲に駆られたのである。

この作品の第一巻が書き上がり、その序論部分に据えようと、わ

れらがオスマン語の科学に対するかわりのほどに関する詳細な論考を置くことにした。⁵¹⁾ この論考はもちろんのこと、人類のあいだで初めて知識というものが出現したことについてヨーロッパ人がなしたとげた探究の結果と、イスラームのウラマーが勝ち得た探究の結果とを比較して得られた結論の詳細を、一度なりとも知の巨匠たる今は亡きジェヴデト・パシヤに見ていただきたいとこいねがった。作品をお送りすると、「ジェヴデト・パシヤは」もったいなくも貴重なご卓見を記したお便りを寄こしてくださった。だが、しばらくして見解と考察を改められたことにより、くだんのお便りを返却せよとお命じになり、その代わりに別のお便りを書き送ってくださった。

今にして思えば、如上の論題はまことに繊細極まる重要な問題だったのだ、小生はじっくり時間をかけて深思熟考する質の人間とは申せ、探究の結論に自信が持てず、ジェヴデト・パシヤのような知の大先達にかがいを立てる必要に迫られたのであった。ジェヴデト・パシヤもまた、最初のお手紙で披露なさった考察を変更する必要があるとお考えになったようであるが、ファトマ・アリエエ史にはこの重要な件を報せる必要はないとお考えでいらっしゃった。だが、今は亡きジェヴデト・パシヤは、それまで五年ほど大成に向けて努力を傾けてきた令嬢が到達した水準を、私はおろかほかのだれよりもよくご存じだったので、この重要な問題についてファトマ・アリエエ女史に意見を聴くことも厭わなかった。当時、今は

亡きパシヤはふだんどおり（ルーメリ・ヒサール付近の）ベベキにある別邸にいたのだが、アリエエ女史は転地療養のために「イスタンプル市街のアジア側にある」ギョズテペに借りた別墅べっしょにいたので、意見聴取は書簡を通しておこなわれた。この点に関して交わされたやり取りの文書の実物を目にする機会があったので、その原本の写しを以下にそのまま引くことにしよう。

ファトマ・アリエエ女史へ

私の喜びにして誇らしき最愛なるアリエエよ。昨日、ランブー（Lambu?）を「アフメト・」ミドハト・エフェンデイに送っておきました。彼は「科学の歴史に関する」一つ目の書付を送ってきました。その内容に関する細かな修正に貴女を煩わせようとは思いません。ですが、私はその序論を改め、別の前提に立って序論を書いてみたので、それを貴女に見てもらうために送ります。たいへん慌ただしく筆を執ったので、批判的な目でよく見直す必要があるでしょう。もしもその前提が気に入らなかつたり、あるいは過不足ないし頭を混乱させるような個所が見受けられたり、つまりは貴女の気づいたことなら何でも、欄外に指摘してください。そして、すぐにも清書してミドハト・エフェンデイに送れるよう返してください。最愛なる私の眼の光よ。

貴女の父 ジェヴadet

追伸

貴女は疲れていることでしょう。身体を休める必要があります。ですが、かような文章を読むことが貴女にとつて気晴らしになるやもと信じて送ってみました。でなければ、貴女を不快にさせるようなことをするはずがありません。ファーイク・パシヤと（その娘）ハティージェ嬢とアイシエ嬢の目に口づけします。⁽³⁾末筆ながら、わが娘よ、貴女がきつと健やかで心地よく過ごせますように。

以下は、ファトマ・アリエエ女史からの返信である。

私の大恩ある御方へ

偉大なる貴方様のお手紙とご論考の序論を拝受しました。私が入りつかかたり愚考したりするところがあれば何であれ書き送るようにとのお指図にお応えすべく、ひたすら引つかかるところはないかと探しながら読んでみましたが、その結果つぎのようなことに思いました。序論は始めから終わりまで流水のごとく滑らかに進むのですが、二枚目の書紙に線を引いたところから下は、突然説明のしかたや文体が変わっています。そこまでは実説が続くのですが、そこから突然、虚説の世界に入っているのです。上手に書かれた創りごとの価値は、むしろ実説に劣るものではありません。とはいえ、実説から虚説へ、

あるいは虚説から実説へ何の前触れもなく突然移れば、まことの話が創りごとのように、そして創りごがまことの話のように受け取られてしまう可能性がありますまいか。

慌てて書かれたとおっしゃっていたので、私も思いつくままに記しております。でなければ、貴方様に向かって御託を並べる資格などないことを、私は神に感謝しながらわきまえております。私の如上の思いつきが正当なものであるかどうか、それが判明するのは偉大なる貴方様のお心次第でありましょう。ひとたび注意深くお読みになり、もしもそれが偉大なる貴方様の注意を引くようであれば、私めの思いつきが正しいことになりません。その逆であれば、誤りということになりましょう。以上の所見が正しいとして、「序論の」後部分を前半部分に合わせる必要があるか、それとも前半部分を後半部分に合わせる必要があるかと問われれば、この点で卑見の及ぶかぎり、序論は前半部分でとった構成と文体で進めるほうがいっそうよろしいかと存じます。

かくて私の思いつくかぎりのことを申し上げました。私も今日は今日もアブー・バクル様の教えに従ったのです。「お指図は行儀作法に勝る」と。⁵³⁾

こちらの気候はまことにすばらしいのですが、私めは日中こそすこぶる具合がよいものの、夜中に悪くなってしまう。別荘で始まった夜中の発熱は、毎晩続いています。午後一十時

に始まり、午前十一時に収まります。まるで瘧マラリアのようなものでして、それが私を疲労させるのです。今日は断じて体を動かさぬつもりです。これでまた発熱したら、モーリック (Moritz) 先生に診てもらいます。昨日は疲労を顧みず、少し野原を散歩しました。気候の心地よさも手伝い、あたりのエメラルド色をした野原が人を散歩に誘っています。ですが、残念ながら今日は散歩をしたいという気持ちを抑えなければなりません。

フアイイク・パシヤと子供たちが、貴方の足元に口づけいたします。私もみなでお母様の裳裾もすそに口づけいたします。ムフイッティン・ベイの目に口づけいたします。

五月初旬のこちらの気候がどれほどすばらしいかといえば、あらゆる言葉に何かしらの叡智を宿す老婆たちの「私たちにはもったいない」という言葉の真意を、その喜びが私どもに解き明かしてくれるほどです。末筆ながら、全幅の崇敬の念をもって恭順の意を表する次第でございます。

不肖の娘 ファトマ・アリエ

以下は、ジェヴデト・パシヤからアリエ女史への返信である。

最愛なる私の眼の光、アリエよ。

昨日、貴女のお便りを受け取りました。私がどれほど喜んだか、言い表せぬほどです。(奇しくもですが) 論考の序論を慌

てて書いて貴女に送った後、補訂しなければならぬことが頭をよぎりました。科学の歴史について論じていながら、昨年おこなった端艇による船旅のことを合間に紛れさせるのはふさわしくない、何をいわれるか出方をうかがってから修正のかたちを考えようと思っていたのです。貴女のご批判はまさにその話題をめぐるものであることをお便りから察し、私は誇らしさの入りに混じった喜びを感じました。「アフメト・」ミドハト・エフエండిイから来ていた書付を、貴女に送るのを忘れていました。今回、その返事の草稿とともに見てもらうべく同封します。

論考は上述のとおり修正し、今晚清書して今朝がた早くミドハト・エフエండిイに送っておきました。ペンを一本送りません（なかにインクを満たす最新式のペンです）。「自分ではできないので」ファアイク・パシヤにインクを満たしてもらったら、いつでも人を寄こすときに送り返してください。急ぎではありません。予備はたくさんありますから。

「アリ・セダトの息子の」アフメト・ムフイッティン・ベイは貴女からの挨拶をことのほか喜んだのですが、今しがた学校に出かけるところだったので、貴女とファアイク・パシヤの裳裾に、そしてハティージェ嬢とアイシエ嬢の目に口づけすると書いておいてくれと頼んで出ていきました。

末筆ながら、わが娘よ、貴女がきつとご健勝で心地よく過ご

せませすように。

貴女の父 ジェヴエドト

かくてアリエエ女史のご尊父である誉れに、一方では最後の師たる誇りをも加えることになった今は亡きジェヴエドト・パシヤが、くだんの女史に与えていた評価は、以上の手紙から察することができ。かほどの父、かほどの師からかような評価にあずかるとは、たやすく手にするのできる幸福ではない。

アリエエ女史は現在三三歳だが、天賦の才であるところの記憶力や知性はいうに及ばず、「知識はそれを望む者すべてに与えられる」という格言のとおり、彼女が今までに修得した学問の水準は、その年ごろの男性にとつてでさえ、称賛を受け、喝采を浴びるに値するほどのものなのである。「その年ごろ」といったが、そうなのだ。彼女は三三歳なのである。もはやその年ごろになっても学ぶ側であるうとする男性など、何人見つけることができようか。試みに正規の教育を受け、最速で修了証書を取得した場合を考えてみよう。少なくとも二五歳以下では取得できない。人は、その年ごろにやっと見習いの時期を脱するからである。手にした修了資格は、学問を修得し終えたことの証明ではなく、以後学問に取り組む資格があることとの証明にほかならない。アリエエ女史は今も学生をもって任じている。知識を広げ、学習を完成させることに努めている。学問を究めるべく「ゆりかごから墓場まで」「研鑽に努める」という格言に

ふさわしくふるまっている。つまるところ、かねてオスマン帝国の知的発展に尽くしてきた人びとは、現在のアリエエ女史の姿を誇る以上に、二〇年後、三〇年後のアリエエ女史の姿を頼もしく思っているのである。

本書を結ぶにあたり、つぎの真実を確認しておこう。アリエエ女史を育て上げた点で大勢の人びとが多大なる貢献をなしたにせよ、その最大の功労者をご夫君ファイク・パシヤとすることに、識見の高い人びとならば首肯せざるをえない。なぜなら、アリエエ女史をこれほどまでに育て上げるのに何よりもまず必要なのは、ご夫君の同意だからである。なるほど、結婚当初の数年は、ほかの夫連中と同じくファイク・パシヤもまた許しを与えることを渋る側におり、アリエエ女史の思考の営みを多年にわたり中断させた。だが、のちに有徳の令室の天賦の資質を目のあたりにするや、快く許しを与えたばかりか、実際に力添えする努力を惜しまぬようになった。彼女が著述や翻訳を手がけるようになってからは、それを書き取る手助けをしているという。ものを考えたり書いたりすることがいかに困難な仕事であるか知っている者ならば、そうした手助けの価値やありがたさは否定しがたい。私はご夫妻の長齢を心から願うものである。お二人の健筆が衆庶の益となるのだから。「衆庶にとって善きものとは、衆庶に裨益するものなり」。

(完)

付録(一) 『意志』に付されたファトマ・アリエエによる訳者緒言⁵⁶⁾

当代の進歩の趨勢として、このごろ数名の女性の筆になる作品が堂々と目につくようになり、彼女らはおのれの作品を数名の文筆の士に添削してもらったと公言してはばからないが、これも女性によくあるいたらなさゆえのことである。かくいう私も、これらの作品にならって何ごとかを記そうと思いついた。そして、フランスの著名な作家の一人ジュールジュ・オーネの『ヴォロンテ』つまり『意志』と題する作品の翻訳に着手し、私も文筆の士のお一人に添削してもらう必要があると感じたが、おのれの筆で綴ったとおりに公刊するほうがよろしかろうと考えた。もちろん、いたらぬところもあるにはちがいない。だが、たとえいたらぬところがあるにせよ、女性なりの文房というものも文学の世界にはあるのだということが知られ、同様の境遇にある女性の手本になればと思う。本訳書の過誤や不備が偉大なる文士たちのお目こぼしにあずかることを、私は願う次第である。というのも、初めて作品を上梓する殿方ですら免れぬこの不具合を、文学の世界でようやく見かけるようになったばかりの女性に限って免れるはずもないと思われるからである。もとより見つかるはずの過誤や不備が赦されるとして、もっぱらこの方向で志を同じくする女性に勇気を与え、先導者として道を切り拓くべく、お手元にある本訳書『意志』は無駄に終わることなく受け入れられるものと思われる。私はおのれの文才のいたらなさをいささかなりとも補うべく、翻訳する小説には傑作を選ぼうと決めていた。そして、真

実から逸れずに人間のありのままの姿をめぐりに描き、このごろ世界各地で好評を博している作品をもって小説家として格別の地位を手にしたジュールジュ・オーネの諸作を読み、まだトルコ語に翻訳されていないもののうち『ヴォロンテ』と題する小説を選んだ。この点で私の見立てにまちがいがなかったことは、くだんの原著が上梓されたとき、その売れ行きとして二年間で一〇二刷に達したことが証しているのである。

一 婦人（ファトマ・アリエ）

付録（二） ファトマ・アリエからアフメト・ミドハトに送付さ

れた礼状⁵⁷

アフメト・ミドハト・エフェンディ様へ

私のエフェンディ様。

慈悲深き貴方様が運営なさっている栄えある新聞『真実の解説者』の第三五一六号の紙面において、私などにはまことに過ぎたる賛辞と評価を記したご名筆を、ありがたく拝見いたしました⁵⁸。この賛辞とお慈悲が愚作に対する当然の報いであるなどと慢心することなく、むしろ文学の世界でヒジャーブを被りながらも（ムスリム女性であるにもかかわらず、という意味）第一歩を踏み出すことのできたこの私めに、その方向でいっそう精進できるように激励と勇氣をお与えになるといふ清らかなお心遣いにほかならぬことと心得ております。立ち上がることはできてはまだ歩くことのできぬ子供

に、何とかして足を踏み出すことを教えようとするとき、子供が第一歩を踏み出して前に進む勇氣を持てずに立ちすくむと、勇氣を与えるべくその子の目の前に何かキラキラしたのを見せることがあります。子供もそれを手にしようとの思いで躊躇を勇氣に変え、それに向かつて歩き出すものです。私も文学の世界に印した第一歩目において、目の前に「女流文士」なる誇らしき称号が示されることで熱意と勇氣が高められ、忍耐と努力が認められればと願っております。神が望み給うなら、私もいつの日かその称号を名乗るにふさわしい力を手にすることでしよう。貴方様のような第一等の文士にして有徳の名士からいただきたいのもの、これにほかなりません。貴方様は教育への多大にして誇るべきご貢献に自足することなく、さうらに多くの奉仕者を育て上げるといふご才能によって私どものごとく浅学菲才の徒を励まし、教育と文学における親愛の情を証していらつしやいます。オスマン帝国の出版界において、小説の何たるかをお示しになる点で第一等の榮譽を手になさったのは貴方様にほかならず、さうらに速やかかつ力強くお拓きになった文学の王道において、後進のだれ一人として貴方様に追いつくことができず、それゆえ開拓者にして無双の高みにいらつしやる榮譽に浴しているのも慈悲深き貴方様にほかなりません。人間の避けがたき性として、人は何か物事に取りかかろうとするとき、その物事の最上ものを模倣するものです。ですが、それと同じようになるかといえ、そうはいきません。それでも、わずかであれ似せてみたいと願うもので

す。わが師よ、翻訳の点で私も貴方様を模倣する者であります。つ

まり、フランス語から逐語訳しては私どもの言語（オスマン語）の文体に決してなじまず、たいそう貧寒な感じがしてしまうと
思われたので、できるだけ意識を心がけ、オスマン語にふさわしい
かたちで訳すことに努めました。翻訳に取りかかる前に、私はたく
さんの翻訳作品を熟読しました。上手に書かれたものを大いに楽し
みながら読んだことはもちろんですが、上手に書かれていないもの
でも倦まずに読みました。なぜなら、みごとに書かれたものから学
んで長所を吸収するだけでなく、上手に書かれていないものの過誤
や不備を確かめて自作を直すことで、得るところがあればと思いな
がら読んだからです。かくて両者のあわいから何かを生み出せるに
ちがいないとの希望から出版界に作品を上梓する挙に及んだのでし
て、私に熱意を与えてくれたのもその希望にほかなりません。そう
です、希望とは何とすばらしいものでしょうか。それがあれば大目
標にも到達することができ、それがなければ何ごとも始められない
のです。希望が人類に与える精神的影響を考えてみれば、その価値
の高さが理解できます。圧制に虐げられ、悲しみや苦しみに打ち沈
んでいた人間が、もはや苦悩しておのれを苛むような人生に見切り
をつける状態に立ちいたったとき、その人のもとに思いもかけぬ加
勢のようなものがやってまいります。それは何か。希望ではないで
しょうか。ですが、この世ではすべてのものが滅びる定めがありま
して、希望の力も寿命のかぎり続き、寿命が尽きるとともに消滅い

たします。

いうなれば、希望とは寿命のかぎりの魂の糧と申せましょう。人
間は希望なしでは生きていけません。みずからは姿を見せずとも、
みなにそれぞれの力のかたちで作用するこの精神的な力の影響ゆえに、
私もおのれの想念を押しとどめることができず、筆を執りたいとの
気持ちを抑えることができませんでした。希望がなければ、非才の
身をかえりみず文学の世界に足を踏み入れることもなかったでしょ
うし、その王道を進んで「女流文士」の称号を名乗るにふさわしい
力を手にしたいなどという熱意を抱くこともなかったでしょう。で
すが、私の初めての試みを偉大なる文士のお歴々のお慈悲に、また
愚作の過誤や不備もお歴々のお情けにおすがりして、私はこの方向
で本懐を遂げたいとの希望に駆られたのです。この拙き作品が慈
悲深き貴方様のご好評とご愛顧をたまわるだけで私としては十分な
のですが、どうにもこの世の有様は不可思議なものでして、異を唱
える人びとが出るやもと恐れ、匿名で小説（の翻訳）を発表してお
ります。なぜなら、婦人に諷刺は似つかわしくないからです。た
だ、比類なき貴方様の新聞（『真実の解説者』）において、「どなた
であるかも存じ上げぬこの女性」という文言からご懸念があるもの
と察せられましたので……。

『意志』の訳者（ファトマ・アリエ）

- (1) フランス語辞書の購入をめぐる変心については、本訳稿の前編「二、少女期」の章を参照のこと。佐々木紳訳『アフメト・ミドハト著『ファトマ・アリエエ女史、あるいはオスマン人女流作家の誕生』(前編)』『成蹊人文研究』(成蹊大学大学院文学研究科) 二九、二〇二二年、七二〜七三頁。
- (2) 東方の学問 (*‘ulûm-ı şarkîye*) : () にはアラビア語やペルシア語、またイスラームの教学や道徳に関する学問のことを指していると考えられる。
- (3) 前編「二、少女期」(同訳、七〇頁)を参照のこと。ヤンヤ(ギリシア語名イオアニナ) はギリシア北西部の都市。
- (4) この時期からだいたいふあとになるが、こうした女性旅行者の一人に、一八八九年にストックホルムで開かれた第八回国際東洋学者会議でアフメト・ミドハトと知り合い、翌年以降、幾度かイスタンブルを訪れてジェヴデト・パシヤやファトマ・アリエエとも親交を結んだロシアの東洋学者、オリガ・レベデヴァ(一八五四年生れ) がいる。オスマン帝国では「ギユルナル」というトルコ語風の筆名で知られたレベデヴァは、ファトマ・アリエエが著した対話形式の評論『イスラームの女性たち』(一八九二年刊) をフランス語に翻訳した。Aliné, *Les femmes musulmanes*, tr. Olga de Labedeff, Paris, n. d.; cf. Ömer Faruk Akün, “Gülhar Hanım,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslam*

Anklopedisi (TDVIA, hereafter), vol. 14, İstanbul: Türkiye Diyanet Vakfı, 1996, pp. 243-248.

- (5) イルヤス・マタル・エフェンディ(一八五六〜一九一〇年) によるフランス語の教授については、前編「二、少女期」(佐々木前掲、六五〜六七頁) を参照のこと。
- (6) ファーブル (Fabre) : パリ・コミューン後にフランスからイスタンブルに逃れ、アブドゥッラフマン・サーミー・パシヤ(一七九五〜一八八一年、公教育大臣やオスマン帝国議会上院議員などを歴任) の屋敷で家庭教師を務めた。M. Kayahan Özgül, *Yeniçerili Avni Bey*, İstanbul: Dergâh Yayınları, 2015, p. 59.
- (7) サフヴェト・パシヤ (Safvet Paşa 一八一五〜八三年) : サツフェト・パシヤとも。オスマン帝国の政治家。外務大臣や大宰相を歴任。Azmi Özcan, “Saffet Mehmed Esad Paşa,” *TDVIA*, vol. 35 (2008), pp. 467-469.
- (8) ここで述べられているのは、一八七〇〜七一年のプロイセン・フランス戦争(普仏戦争、独仏戦争とも) のこと。七〇年九月にスタン(セタン) でフランス皇帝ナポレオン三世(在位一八五二〜七〇年) を降したプロイセン軍は、同年一〇月から翌七一年一月までパリを包囲した。
- (9) オスマン帝国をはじめとするイスラーム地域では、日没時刻を零時とし、つぎの日没時刻までを一日と数えた(日の出の前後(一〜二時間ずり区切る))。これは、オスマン帝国では「ト

ルコ式」(alaturka) の時間と呼ばれた。対して、夜中の午前零時を基準とする二四時間制は「洋式」(alafanga) の時間と呼ばれた。むろんトルコ式時間の時刻は季節ごとの日没時刻の変化に応じて変動するが、本訳稿ではトルコ式時間から洋式時間に換算する場合、日没時刻を一律に午後六時として計算した。したがって、換算後の時刻はあくまで目安である点に注意されたい。

(10) 前編「二、少女期」(佐々木前掲、五九頁)に、幼少期のファトマ・アリエには週三〇クルシユの小遣いがあてがわれ、それで保母に書籍や新聞を購入してもらっていたとの記述がある。なお、当時は一クルシユ前後で日刊紙一部が購入できた。一リラは二〇クルシユに相当する。

(11) ホジャ・ムスタファ・エフェンディ(Hoca Mustafa Efendi、一八七二年没)：官員養成校(Mahre-i Akdam)の教員として兄アリ・セタトの家庭教師。ファトマ・アリエにも兄の個人授業への陪席を許したが、彼女が一〇歳のときに没した。前編「二、少女期」(同訳、五九～六二頁)を参照のこと。

(12) レフィカ先生(Refika Hanım)：女子師範学校(Dâni-Tinu' alimân)の教師であったイギリス人の改宗ムスリマ。少女期のファトマ・アリエにピアノとフランス語の綴り方を教えた。前編「二、少女期」(同訳、六四～六五頁)を参照のこと。

(13) ベイオール(Beyoğlu)は、金角湾の北に広がるイスタンブール

新市街の繁華街。一九世紀後半に西欧風の街並みに整備され、劇場やキャバレーが立ち並んだ。

(14) 『クルク・アンバル』(Kırk Anbar)は、アフメト・ミドハトが一八七三～七六年に発行した総合学術・文化雑誌。この当該記事は、同誌の創刊号に掲載されたつぎの論考である。
 “Aşk,” *Kırk Anbar*, no. 1 (1290), pp. 3a-15a.

(15) “Bir makine temâşâsından ne ibret alabiliriz,” *Kırk Anbar*, no. 3 (1290), pp. 80a-83b.

(16) この言及されている論説は、『クルク・アンバル』の第一号から始まる連載記事「人体」(Ahvâl-i İnsân)のことを指していると考えられる。“Ahvâl-i İnsân,” *Kırk Anbar*, no. 11 (1291), pp. 322a-325b.

(17) “Hükemâ-yı kadime ile hükemâ-yı cedide arasında ne fark vardır,” *Kırk Anbar*, nos. 23-24 (1292).

(18) 前編「二、少女期」(佐々木前掲、五九頁)を参照のこと。
 ウージェエヌ・シユール(一八〇四～五七年)：フランスの小説家。『パリの秘密』(一八四二～四三年)をはじめとする新聞連載小説で名声を博した。小倉孝誠『パリの秘密』の社会史——ウージェエヌ・シユールと新聞小説の時代』新曜社、二〇〇四年。オスマン帝国でも一八八〇年代を中心に多数の作品がトルコ語に翻訳された。Senem Timuroğlu, *Kanlanmış Kadınlar: Osmanlı ve Avrupalı Kadın Yazarların Dostluğu*,

Istanbul: İletişim Yayınları, 2020, p. 57, n. 35.

- (20) 『パリのトルコ人』 (*Paris'de Bir Türk*) : Ahmed Midhat, *Paris'de Bir Türk*, İstanbul: Kirk Anbâr Matba'ası 1293 [1876]; cf. M. Seyfettin Özege, *Eski Harflerle Basılmış Türkçe Eserler Kataloğu*, 5 vols., İstanbul: Fatih Yayınevi Matbaası, 1971-1979 (vol. 3, p. 1398, here).

- (21) 『農夫ジュセイン』 (*Hüseyn Fellâh*) : Ahmed Midhat, *Hüseyn Fellâh*, İstanbul: Kirk Anbâr Matba'ası, 1292 [1875]; cf. Özege, op. cit., vol. 2, p. 620.

- (22) 『モースルのスレイマン』 (*Süleyman Mâsulî*) : Ahmed Midhat, *Süleyman Mâsulî*, İstanbul: Kirk Anbâr Matba'ası, 1294 [1877]; cf. Özege, op. cit., vol. 4, p. 1610.

- (23) 幼年期に住んでいたシリア北西部のアレッポで、コーヒー給仕長のスレイマン・アアからロバを用いて乗馬の手ほどきを受けたことについては、前編「一、幼年期」(佐々木前掲、五二頁)を参照のこと。

- (24) このくだりに登場する「令夫人」とは、イギリスの旅行家・文筆家ウイルフリド・S・ブランド(一八四〇〜一九二二年)の妻、アン・ブランド(一八三七〜一九一七年)である可能性が高い。一八六九年に結婚したブランド夫妻は、七七〜七八年と七八〜七九年の二度にわたり中東・北アフリカ・インドを旅行した。このうち二度目の旅行の様子を記したアン

の旅行記 (*Lady Anne Blunt, A Pilgrimage to Nejd: The Cradle of the Arab Race*, 2 vols., London: John Murray, 1881; レディー・アン・ブランド『遍歴のアラビア——ベドウィン揺籃の地を訪ねて』田隅恒生訳、法政大学出版局、一九九八年)の第一巻には、マシユラフをまとったアンが馬のそばにたたくむスケッチが付されている。ほかの候補として、たとえばイギリスの探検家・文筆家リチャード・バートン(一八二一〜九〇年)の妻イザベル・バートン(一八三一〜九六年)、同じくイギリスの駐オスマン大使にして考古学者ヘンリ・レヤード(一八一七〜九四年)の妻イーニッド・レヤード(一八四三〜一九二二年)、あるいはフランスの考古学者マルセル・オーギュスト・デュラフォワ(一八四四〜一九二〇年)の妻ジュエー・デュラフォワ(一八五一〜一九一六年)などが考えられるが、いずれもここに描かれた「令夫人」のプロフィールとは微妙に異なる点がある。

- (25) このくだりに見えるシユエの作品の抄訳とは、Eugène Sue, *Kebâ'î-i Seb'â: Şikempewri (Oburîkî)*, tr. Mihalaki, Kostantinye [İstanbul]: Matba'a-i Ebu'l-Ziyâ, 1299 [1882] の *كجاءه*。 Cf. Timurçlu, op. cit., p. 57, n. 35.

- (26) 『意志』のトルコ語訳に付されたファトマ・アリエエによる訳者緒言については、本訳稿の付録(一)を参照のこと。

- (27) カスバル (*Kasbar*) 書店は、カスバル・カイセリヤンがイスタ

- ンブル旧市街のバープ・アーリー通りに構えた書肆。Johann Strauss, “Les livres et l'imprimerie à Istanbul (1800-1908),” Paul Dumont (ed.), *Turquie: Livres d'hier, livres d'aujourd'hui*, Istanbul: Isis, 1992, p. 15.
- (28) “Yeni Kitâblar: *Merâm*,” *Serwet*, no. 560 (31 Kânûn-ı Sâni 1305 / 12 February 1890), p. 2 (訳者未見)。Cf. Muhsenecel Kızılan (ed.), *Fatma Aliye Hanım: Yaşamı-Sanatı-Yapıtları ve Nisvan-ı İslam*, İstanbul: Matlu Yayıncılık, 1993, p. 18, n. 5.
- (29) ハッコに見える『真実の解説者』の該当記事は、同紙第三五一六号に掲載された「『意志』の訳者、女流文士」(Mürcime-i *Merâm*, Bir Edibe) のことである。この記事については、本訳稿の訳注(58)を参照のハコ。
- (30) ハッコに見える「慈悲深き」(arîfettâ) という文言は、オスマン帝国の官等で宰相 (vezir) に次ぐ上等官 (bââ) に対して用いられた定型の敬意表現である。アフメト・ミドハトは、一八八九年に上等官となっていた。Hakkı Tarkı Us (ed.), *Bir Jübilemin İntiba'ları: Ahmed Midhat'ı Anıyoruz*, İstanbul: Vakıf, 1955, p. 19.
- (31) ファトマ・アリエエは、一〇歳のころからアフメト・ミドハトの「娯楽物語集」(Ueta'if-i Rivâyât) などを通して彼の著作に親しんでいた。前編「二、少女期」(佐々木前掲、六七～六九頁)を参照のこと。
- (32) ファトマ・アリエエがアフメト・ミドハトに送り、『真実の解説者』に掲載された礼状については、本訳稿の付録(二)を参照のハコ。
- (33) 『意志』の翻訳を「一婦人」(Bir Kadın)の筆名で発表したファトマ・アリエエは、その後しばらく『意志』の訳者(Mürcime-i *Merâm*)と呼ばれて知られるようになった。
- (34) 『旧訓』は、ファトマ・アリエエが一八九一年に初めて実名で発表した小説。Fatma 'Aliyye, *Muhâzarât*, İstanbul: Matba'a-i Ebû'l-ziyâ, 1309 [1891]。同書を刊行したアラケル (Arake)書店は、アラケル・トズルヤン(一九二二年没)がイスタンブル旧市街のバープ・アーリー通りに構えた書肆。Strauss, op. cit., p. 14.
- (35) この評伝が刊行された一八九五年から「三〇年ほど」前とは、アフメト・ミドハトが当時トウナ(ドナウ)州知事であったミドハト・パシヤ (Ahmed Şefik Midhat Paşa, 一八二二～一八四四年)に見込まれて、州官報『トウナ』の編集に携わっていた時期にあたる。つまり、当人が初めて文筆業に「こころざし」で以来、簡潔な文体を心がけてきたといわんとしているのである。
- (36) ここに見える「オイラー博士」とは、一八世紀のスイスの数学者レオンハルト・オイラー(一七〇七～一八三年)のことである。ファトマ・アリエエは、彼が一八世紀後半に著した書簡体の科学入門書『ドイツの公女への手紙——物理学と哲学に

関する種々の論題』(Leonhard Euler, *Lettres à une princesse d'Allemagne sur divers sujets de physique et de philosophie*, 3 vols., Saint Petersburg: Imprimerie de l'Academie impériale des sciences, 1768-1772) をトルコ語に翻訳し、『真実の解説者』に連載した。Cf. Timuroğlu, op. cit., pp. 95-96; 有賀暢迪『力学の誕生——オイラーと「力」概念の革新』名古屋大学出版会, 二〇一八年, 九五〜九六頁。

(37) そのいくつかは、この文献に収載されている。Ahmed Miḥat Efendi, *Fuzul ve Feylesof Kızını: Fama Alye'ye Mekuplar*, eds. Fama Samime Inceoğlu and Zeynep Süstü Berkaş, Istanbul: Klasik, 2011.

(38) ここで言及されているのは、『真実の解説者』に四回にわたって連載された「正書法の基礎について」と題する論考と考えられる。Fama 'Alye, "Üss-i İmlâ Hakkında," *Tercüman-ı Hakikat*, nos. 3728-3731 (11-14 Kânun-ı Evvel 1306 / 23-26 December 1890). Cf. Kızılan, op. cit., p. 36.

(39) ラマダーン月：ヒジュラ暦の第九番目の月。いわゆる断食月のこと。

(40) ベヤズト・モスク：イスタンブル旧市街のベヤズト地区にあるモスク。オスマン朝第八代君主バヤズィト(ベヤズト)二世(在位一四八一〜一五二二年)が一六世紀初頭に創建した。(41) 故人に対して唱える祈念の定型句。ここからも、本書が刊行

された時点ですでにジェヴデト・パシャが死去していたことがわかる。この点については、本訳稿の前編に付した「はじめに——訳者解題に代えて」を参照のこと。

(42) ジェヴデト・パシャは一八八六〜九〇年に五度目の司法大臣職を務めた後、官界を引退した。

(43) 聖なるマスナヴィー(Mesnevî-seriye)：ペルシア文学最大の神秘主義詩人と評されるジャラルルーディーン・ルーミー(一二〇七〜七三年)が作成した神秘主義叙事詩集成『精神的マスナヴィー』のこと。マスナヴィーは、ペルシア詩に独特の伝統的詩型の一つである。

(44) 『外套の頌詩』(*Kaside-i Bürde*)：エジプト出身の神秘主義詩人ブーサイリー(Muhammad b. Sa'îd al-Buṣrî, 一二九六年頃没)が、イスラームの預言者ムハンマドから外套(ブルダ)をかけてもらう瑞夢を見て作成した頌詩(カサイーダ)のこと。

(45) ジェヴデト・パシャは、一八世紀に中途で終わっていた同書のトルコ語訳を完成させたことでも知られる。Ahmed Cevdet Paşa (tr.), *Mukaddime-i İbn-i Haldun'un Fasl-ı Sâdsinin Tercümesidir*, Istanbul: Takvîmhâne-i 'Âmirî, 1277 [1860]; cf. Özge, op. cit., vol. 3, p. 1220.

(46) アブル・フィダー(Abü'l-fîdâ, 一二七三〜一三三二年)：アイユーブ朝(一二六九〜一二五〇年)の家系に連なる歴史家、

地理学者。

- (47) イブン・ハッリカーン (Ibn Khallikan, 一二二一〜八二二年) : イスラームの四法学派の一つ、シャーフイー学派の法学者。伝記編纂者としても知られる。

- (48) ファトマ・アリエは一九〇〇年、古代から近世までの哲学史を概観する『哲学者列伝』を刊行している。Fama 'Aliyye, *Terâcim-i Ahvâl-i Felâsife*, Istanbul: Hammlara Mahsûs Gazete Matba'ası, 1317 [1900].

- (49) 法律家としても知られるジェヴデト・パシヤは、スンナ派四法学派の一つ、ハナフィー学派の解釈に基づく成文民法典『メジュッレ』(一八六九〜七六年)の編纂を主導した。

- (50) トルコ共和国イスタンブールのアタテュルク文庫 (Atatürk Kitaplığı) に収められている、ジェヴデト・パシヤがファトマ・アリエへの講義用に作成した「アリエのための書付」(Mecmû'a-i 'Aliyye) と題する三冊の手書きの帳面が、これにあたると考えられる。 Cf. Yusuf Halacoglu and Mehmet Akif Aydın, "Cevdet Paşa," *TDVİA*, vol. 7 (1993), p. 449.

- (51) ここで言及されている「作品」とは、『科学の歴史』(*Tarih-i 'Ulum*)と題するアフメト・ミドハトの未発見の著作のことである。アフメト・ミドハトは一八九四年春にファトマ・アリエに宛てた書簡のなかで、この作品を執筆中であることしばしば言及し、同年五月には草稿が仕上がったことを示唆

しているが (Ahmed Midhat Efendi, op. cit., p. 199, 216, 223) 死後に作成された最も詳細な著作リストに同名の作品は収

- 載されていない (cf. Us, op. cit., pp. 169-172)。なおアフメト・ミドハトは、イギリスで生まれ米国で活動した科学者・歴史家、ジョン・ウイリアム・ドレイパー (一八一〜八二一年) の『宗教と科学との相克の歴史』(John William Draper, *History of the Conflict between Religion and Science*, New York: D. Appleton, 1874; ショーン・W・ドレイパー『宗教と科学の闘争史』平田寛訳、社会思想社、一九六八年) のフランス語訳をトルコ語に重訳し、一八九六年から『真実の解説者』に連載した後、一八九七〜一九〇〇年に単行本化した (J. W. Draper, *Nizâ'î 'İlm ü Din*, tr. Ahmed Midhat, 4 vols., *Der-sa'âdet* [Istanbul], 1313-1318)。このトルコ語訳には、アフメト・ミドハトによる訳者緒言として「イスラームと科学」(İslâm ve 'Ulum) と題する論考が付されている (ibid., vol. 1, pp. 2-14)。 Cf. M. Orhan Okay, "Nizâ-i 'İlm ü Din," *TDVİA*, vol. 33 (2007), pp. 172-173.

- (52) ファトマ・アリエはファーイク・パシヤとのあいだに、ハテイージェ (一八八〇年生れ、没年不詳)、アイシエ (一八八四〜一九六七年)、ニーメト (一九〇〇〜一九七二年)、ズベイデ・イスメト (一九〇一〜九二年) の四人の娘を設けた。Timuroğlu, op. cit., p. 26. この書簡が記された一八九〇年代前半に後二者

は生まれていないので、むしろ言及はない。なお、引用文中の()内の補足は原著のママ。おそらくアフメト・ミドハトが付記したものと思われる。

- (53) アブー・バクル(五七三年頃〜六三四年)は預言者ムハンマドの死後、初めてそのハリーフア(カリフ、アラビア語で「代理人」ないし「後継者」の意)になった人物。ここでファトマ・アリエがアブー・バクルに触れるのは、彼がムハンマドの言いつけを忠実に実行したといわれるように、自分も失礼を承知の上で指図どおり論考の添削に及んだといいたいためである。Cf. Ahmet Mithat Efendi, *Fatma Akiye Hanım Yahut Bir Muharrire-i Osmaniyenin Neşeti*, ed. Müjge Galim, İstanbul: İsis, 1998, p. 78, n. 97.

- (54) ムフイッティン・ベイ(一八七八年生れ)・ファトマ・アリエの兄アリ・セタトの息子。Ibid., p. 78, n. 99.

- (55) 「今晚清書して今朝がた早く」・トルコ式時間では日没時刻を一日の起点とするため、このような表現になる。むしろ、昨晚清書して今朝送ったという意味である。トルコ式時間については、本訳稿の訳注(9)を参照のこと。

- (56) Bir Kadın (r.), *Mervân, Der-sâ'adet [İstanbul]: Kasbâr Maba'asi*, 1307, pp. 2-3.

- (57) Mütcerime-i Mervân, "Yaraka-i Mahsûsa," *Tercümân-ı Hakikat*, no. 3519 (16 Şubat 1305 / 28 February 1890), p. 5b-5c.

(58) 『真実の解説者』に掲載された『意志』の訳者、女流文士」と題するアフメト・ミドハトの記事は、以下のとおり。「フランスの著名な文筆の士の一人、ジョルジュ・オーネの『ヴォロンテ』と題する娯楽小説が一人によって翻訳中であることは、もちろん読者諸賢にも周知のことである。『意志』と命名されたこの小説の第四分冊が、このたび待望の配本とあ

なった。著作物の出版に関して当今目にする趨勢のすばらしさを評価するためにも、一婦人によって翻訳された同書をとくと吟味する必要がある。つまりは当代の学知の成果が叡智や良心の持ち主の心を等しくつかんだのであって、こんにち一人のオスマン人女流文士が、フランスの天才的人物の佳作をわれわれの言語〔オスマン語〕に訳すことにより、オスマン人女性の異才を称誉称賛の渦に引き込んだのである。どなたであるかも存じ上げぬこの女性がおこなつた、オスマン帝国の出版界やオスマン人に名誉をもたらす崇高なる努力を、われわれは心から誇らしく思い、謝意を表する記事を掲載するとともに、かような叡智の作品を継続して発表なさることで本邦の書庫を充実させてほしいとこいねがう次第である。』
[Ahmed Mithat,] "Mütcerime-i Mervân, Bir Edîbe," *Tercümân-ı Hakikat*, no. 3516 (13 Şubat 1305 / 25 February 1890), p. 3a.